

長野県植物誌改訂調査で確認された県新産種の紹介 IV

藤田 淳一*

1. はじめに

「コロナ禍」という言葉が生まれ、生活・仕事の様式が様変わりして2年目となった。植物相解明のための活動は特に影響を受けることもなく、長野県内には、目の前に人に気づかれることなく生育している植物がいくらでもある状況に変化はない。これまでグリーンシーズンにせっせと標本を集めて、オフシーズンに文献を当たるとというのが常態化していたのが、少しでも気になる種があれば原記載等をあたり、その都度詳しく調べるというのが習慣化している。コロナ禍が地道な調査に専念するための機会を与えたと言っても過言ではなく、新しい発見と、さらなる疑問が山積している。今回は長野県で標本記録がなかったもののうち、見落とされがちと思われるものを選んで紹介する。

2. 県新産種

以下に新産種を示す。また、図1～17に標本写真を示す。図中の標本番号のうち、TCCNは筆者の個人番号、OAMは大町市立大町山岳博物館、「安曇野」は豊科郷土博物館である。現段階で公的な機関に寄贈していない標本は追って寄贈する。

(1) オオチゴユリ

Disporum viridescens (Maxim.) Nakai (イヌサフラン科)

佐久穂町海瀬のスギ植林林縁において生育を確認した。和名はチゴユリという名称が付けられているが、はるかに大型で茎の上部で分枝し、各枝先に花をつける点が異なる。本種は、県内各地に生育しているものではないが、隣県の山梨県ではごくありふれた種であり、大きな群落を形成するため、生育していれば容易に気づくことができる。遠目に見て普通種のハウチャクソウ *D. sessile* D. Don ex Schult. et Schult. f. var. *sessile* として処理されてきた可能性も考えられる。

(2) キズイセン

Narcissus jonquilla L. (ヒガンバナ科)

安曇野市穂高の農耕地の畦畔において生育を確認した。ラッパズイセン *N. pseudonarcissus* L. よりも花が小さく、スイセン *N. tazetta* L. よりやや花が大きく、花被片が黄色い点で区別できる。長野県内の農耕地周辺に逸出している *Narcissus* は、ラッパズイセンが最も多く、ついでキズイセンが多い。スイセンは人家周辺に植栽されているものは多いが、植栽以外の逸出は少ないと認識している。

(3) オオアマナ

Ornithogalum umbellatum L. (クサスギカズラ科)

松本市大字蟻ヶ崎のハリエンジュ林床において生育を確認した。本種は農耕地の畦畔、コナラやハリエンジュ等の林床の明るい落葉樹林林床に生育するのを県内各地で目撃している。県内で既に標本記録のある同属のホソバオオアマナ *O. orthophyllum* Ten. よりも本種の方が多く生育していると考えられる。星のような花は見応えがあり、美しいが、他の外来種のように開けたかく乱地のみに進入するのではなく、耐陰性があるためにより広い環境に入り込む可能性があることに注意が必要である。野外で観察していると種子繁殖はあまりせず、分球による栄養繁殖を盛んに行っているようである。

(4) ケスゲ

Carex duvaliana Franch. et Sav. (カヤツリグサ科)

泰阜村門島の南向き斜面の乾燥した岩上に群生しているのを確認した。一見すると走出枝のないチャイトスゲ *C. sachalinensis* F. Schmidt var. *aureobrunnea* (Ohwi) Ohwi のようにみえるが、硬い毛が全草に密生していることから容易に識別できる。本種は、群馬県、山梨県等、関東各地にごく普通に生育しており、長野県内では、東信から確認されたと考えてきたが、今回南信での確認となった。きちんと手にとって確認すれば、他種と混同することはないため、今後の県内分布の解明が期待される。

(5) メアオスゲ×クサスゲ

Carex leucochlora Bunge var. *candolleana* (H. Lév. et Vaniot) Katsuy. × *C. rugata* Ohwi (カヤツリグサ科)

天龍村平岡の道路脇の湿った斜面において生育を

* 藤田 淳一 長野県松本市
aegithalos-caudatus@celery.ocn.ne.jp

確認した。クサスゲ *C. rugata* Ohwi の特徴を強く受けており、乾燥した全草が黒ずみ、一見クサスゲにみえたが、果胞の表面に毛が散生し、根際に常に雌小穂を生じ、雌鱗片の先端部が時々長く伸びる点など、メアオスゲの *C. leucochlora* Bunge var. *candolleana* (H.Lév. et Vaniot) Katsuy. の特徴を引き継ぎ、果胞の大半が不稔であることから、両種の雑種と推定した。*Carex* の中でも特に種数が多いヌカスゲ節は種同定が困難であることから、交雑に気づかれにくいと考えられ、本推定雑種のほか、イトアオスゲ *C. leucochlora* Bunge var. *gracillima* (Akiyama) Katsuy. × ノゲヌカスゲ *C. mitrata* Franch. var. *aristata* Ohwi、アオスゲ *C. leucochlora* Bunge var. *leucochlora* × ノゲヌカスゲの推定雑種等を県内で確認しており、追って報告する。

(6) シカクイヌホタルイ

Schoenoplectiella × *yashiroi* J.Oda et Nagam. (カヤツリグサ科)

安曇野市穂高の現行田において生育を確認した。イヌホタルイ *S. juncoides* (Roxb.) Lye とカンガレイ *S. triangulata* (Roxb.) J.Jung et H.K.Choi var. *triangulata* の雑種である。長野県内にはカンガレイはそれほど多くないが、カンガレイを片親とする雑種はごく普通に生育しており、特に本雑種は普通種と呼べる存在である。筆者も存在には気づきながら、適当な和名がなく、特徴の近いホタルイ *S. hotarui* (Ohwi) J.Jung et H.K.Choi とカンガレイの推定雑種であるシカクホタルイ *S.* × *trapezoidea* (Koidz.) J.Jung et H.K.Choi を無理矢理あて続けてきた。そもそもサンカクホタルイ (サンカクイ *S. triquetra* (L.) Palla × ホタルイとされてきたがシカクホタルイと同じとされる) とシカクホタルイについても以前から混乱あり、シカクホタルイという和名でやり過ごしたところが大きい。織田ら (2015) により整理がなされたため、正直にシカクイヌホタルイの名称を使用することにした。長野県内では、カンガレイを片親とする雑種の大半はシカクイヌホタルイであり、まれにシカクホタルイがみられる。シカクイヌホタルイはシカクホタルイに比べて小穂が長く、先端がとがるため、この2雑種の識別は細部をみる必要がない。ただし、よく似たタイワンヤマイ *S. triquetra* (L.) Palla の関与した雑種も長野県内に分布していると考えられるため、結局は瘦果を丹念に検鏡する手間を省くことは難しい。

(7) コイチゴツナギ×オオイチゴツナギ

Poa compressa L. × *P. nipponica* Koidz. (イネ科)

天龍村平岡の道脇において生育を確認した。外来のコイチゴツナギ *P. compressa* L. とオオイチゴツナギ *P. nipponica* Koidz. の推定雑種である。走出枝はなく、オオイチゴツナギに酷似し、内穎竜骨に軟毛がするが、桿が平たく、竜骨が発達するコイチゴツナギの特徴をあわせ持つ。花は終わるとともに結実することなく脱落しており、不稔と考えられる。道端のオオイチゴツナギは多型であり、他種と交雑していても自信を持って雑種といえないことが多いものの、片親がコイチゴツナギのような他種にみられない特徴を有していれば比較的容易に判断ができる。本推定雑種は佐久穂町でも採集している (TCCN21-0286)。以前は容易と考えてきたコイチゴツナギが近年同定しづらいと感じていたのは、他種との交雑品をみている可能性があり、細心の注意が必要である。

(8) ツクスズメノカタビラ

Poa crassinervis Honda (イネ科)

松本市市場の未舗装路において生育を確認した。アオスズメノカタビラ *P. annua* L. subsp. *annua* に似るが、花茎が太く、小穂の第二苞穎が楕円形で、角張りがなく、護穎の脈上に伏毛が密生する。関西以西の分布とされてきたが、筆者は、神奈川県、富山県、岐阜県、愛知県でも生育を確認しており、物流により国内移入されてきたものと考えられる。長野県内では、松本市の他、飯田市でも生育を確認しており (TCCN21-0250)、他の市街地にも生育している可能性が高い。本種とスズメノカタビラの推定雑種に至っては、松本市街地に広く生育している。

(9) ヨツシベヤマネコノメ

Chrysosplenium japonicum (Maxim.) Makino var. *tetrandrum* (H.Hara) Y.N.

池田町会染のスギ植林林床において生育を確認した。基本種のヤマネコノメソウ *C. japonicum* (Maxim.) Makino var. *japonicum* の葯が8本であるのに対し、本変種は、葯が常に4本である点が異なる。その他の形態、生育環境に差異はみられない。この程度の変異を敢えて区別しないという選択肢もあるが、葯が少なくなる変異の存在に気づいた上で区別の是非を議論する必要があると考え、問題提起を兼ねてリストアップした。

(10) ナガサキハギ

Leepedeza × *miquelii* S.Akiyama (マメ科)

辰野町小野の道路脇において生育を確認した。ヤマハギ *L. bicolor* Turcz. とマルバハギ *L. cyrtobotrya* Miq. の推定雑種であり、各部の形態的特徴は、マルバハギに近く、小葉がマルバハギよりも細長い点に違和感を抱く程度である。開花した花はみな結実せず脱落していることから、不稔と考えられる。長野県内に非常に多いマルバハギとツクシハギ *L. homoloba* Nakai との雑種 *L.* × *cyrtoloba* S.Akiyama は、萼裂片が短くなる点や結実率が高い点で異なる。*Leepedeza* は吹付け由来のものや種間雑種が多く、困難を極める。県内では、このほか、オクシモハギ *L. davidii* Franch やオクシモハギを片親とする雑種も確認しており、他種との関係性を含め一通り整理ができた段階で報告する。

(11) タヨウハウチワマメ

Lupinus polyphyllus Lindl. (マメ科)

松本市奈川の道路脇において生育を確認した。「シュッコルピナス」の名前で流通し、寒冷地では旺盛に繁殖する。長野県内でも高原周辺の道路やスキー場の法面で逸出個体が群生しているのをみかけが、同所的に長期間群生し続ける様子はなく、他の高茎草本に覆われるとすぐに消滅するため、同所的に生育し続けるには、除草などの庇護が必要なのだろう。多年生草本であるが、夏の暑さに弱く、自然条件下では、標高 1,000m を超える場所でない、春から初夏にかけて開花後枯死してしまうことが多い。

(12) ユウキシダレ

Salix × *lasiogyne* Seemen nothosubsp. *yuhkii* (Kimura) H.Ohashi (ヤナギ科)

安曇野市明科の河川敷において生育を確認した。シダレヤナギ *S. babylonica* L. var. *babylonica* とシロヤナギ *S. dolichostyla* Seemen subsp. *dolichostyla* の推定雑種である。確認個体は雌株で、子房の表面に伏毛が密生し、生長した充実した葉に伏毛が残りやすいというシロヤナギの特徴を持ちながら、充実した葉が細長く、葉脚が楔形になり、枝が下垂するシダレヤナギの特徴を有する。中信地域で見られるシロヤナギ種群は、多くが狭義コゴメヤナギ *S. dolichostyla* Seemen subsp. *serissifolia* (Kimura) H.Ohashi et H.Nakai、まれにコゴメヤナギとシロヤナギの移行型がみられる。このような事情から、シ

ロヤナギ種群とシダレヤナギとの雑種は、狭義コゴメヤナギとシダレヤナギの推定雑種シロシダレヤナギ *S.* × *lasiogyne* Seemen nothosubsp. *lasiogyne* の方が多いと考えられ、今後みいだされる可能性がある。

(13) イヌハナタデ

Persicaria × *musashinoensis* Hiyama (タデ科)

塩尻市洗馬の林道沿いにおいて生育を確認した。イヌタデ *P. longiseta* (Bruijn) Kitag. とハナタデ *P. posumbu* (Buch.-Ham. ex D.Don) H.Gross の推定雑種である。各部形態はイヌタデとハナタデの中間で、葉裏の白みや毛の生え方も見事に中間的である。花は結実することなく脱落しているため、不稔と考えられる。イヌハナタデのタイプ標本（檜山庫三、1956 年 10 月 4 日、収蔵：TNS）は、Y リストにおいて「イヌタデそのものにみえる。」との指摘がなされており、実態のわからない状態となっているが、形態的特徴を踏まえ、イヌタデとハナタデの推定雑種に対し、イヌハナタデ *P.* × *musashinoensis* Hiyama の和名、学名を使用する。

(14) ハナヒメウツギ

Deutzia gracilis Siebold et Zucc. f. *macrantha* (Makino) Sugim. (アジサイ科)

阿南町和合の道路沿いにおいて生育を確認した。本種は、ヒメウツギの *D. gracilis* Siebold et Zucc. の品種であり、花卉が長さ 1cm を超え、狭義ヒメウツギと比べて花が一回り大きく見え、花数が多く、開花時には花序枝が花の重みで下垂するほどである。広域で見れば、ヒメウツギとハナヒメウツギの形態は連続的であり、区別しない傾向にあり、近年の文献では、高知県植物誌（2009）において明記されているに留まる。長野県内に限ってみれば、ハナヒメウツギは、県内各地で同時多発的に生じる変異ではなく、南信のみに偏って産し、ハナヒメウツギとヒメウツギの間に迷うような連続性はみいだせないことからハナヒメウツギをリストアップする。

(15) シナノカワラマツバ

Galium verum L. subsp. *asiaticum* (Nakai) T.Yamaz. var. *trachycarpum* DC. f. *shinanense* Hiyama (アカネ科)

安曇野市明科のススキ草地において生育を確認した。これまで長野県内の乾性草原で淡黄色の花を咲かせているカワラマツバは、ほぼ全てチョウ

センカワラマツバ *G. verum* subsp. *asiaticum* (Nakai) T.Yamaz. var. *trachycarpum* DC. f. *album* Nakai という認識でいたが、より厳密にはチョウセンカワラマツバよりも子房表面の毛が約0.15mmと短いシナノカワラマツバという品種に該当することが判明した。シナノカワラマツバの原記載（檜山、1955）では、現・富士見町産の標本1点に対してあてられたものであるが、意識して県内のカワラマツバをみていくと、子房の毛が肉眼では不明瞭なほど短いものばかりが目につく。今後、シナノカワラマツバの標本調査等を行い、分布状況を明らかにする必要がある。

(16) ナンブアザミ（狭義）

Cirsium tonense Nakai var. *tonense*（キク科）

栄村界の岩上の雪崩草地において生育を確認した。北信でナンブアザミと呼び続けてきたものは、葉の幅が狭く、頭花がやや小さい、タイアザミ *C. comosum* (Franch. et Sav.) Matsum. に似たもので、花柄が長い点や葉柄が短い点等、一応ナンブアザミに該当するため、厳密には広義ナンブアザミ *Cirsium tonense* Nakai s.l. と呼ぶべきものであった。SHIN、NAC等のハーバリウムの標本も長野県産のものは、広義ナンブアザミとせざるを得なかった。東北地方から中部地方内陸の豪雪地帯に生育する、葉が広く、頭花が大きな典型的な狭義ナンブアザミの存在は、何年も探し求めて北信を歩き回ってきた。2021年、ようやく新潟県との境界、ぎりぎり長野県というところに狭義ナンブアザミの存在を確認できた。狭義ナンブアザミの分布域の端が長野県北端部に入っており、北信のあとのものは皆タイアザミとの移行型である広義ナンブアザミで、中南信のタイアザミに接続するという分布実態が少し明らかになった気がする。

3. おわりに

植物誌改訂調査が始まって4年が経過した。植物誌の重点調査地域の選定において既存標本点数の少ない場所が「身近な「裏山」」であること（尾関ら、2018）からも、自分の経験からも「標本が採られていない場所」＝「注意を引くような珍しい種がない場所」において普通種に埋もれた普通種を丹念に拾う重要性を感じている。これまで自分の住む松本を中心に普段通うことのできるフィールドを歩いてきた。2022年からは、松本に軸足を置きなが

ら、人手の少ない地区の支援や松本から離れた重点調査地域の多い地区の調査を積極的に行っていき、忘れ去られた情報、気に留められない地味な存在にスポットライトを当てていきたい。

4. 謝辞

大町市立大町山岳博物館（OAM）の標本登録にあたっては、千葉悟志氏、豊科郷土博物館の標本登録にあたっては、松田貴子氏にお世話になりました。ここに記して御礼申し上げます。

5. 引用・参考文献

- 檜山庫三（1955）カワラマツバの一品シナノカワラマツバ，植物研究雑誌 Vol.30pp101
- 檜山庫三（1957）イヌタデとハナタデの雑種，植物研究雑誌 Vol.32pp190
- 門田 裕一，日本のアザミ <https://www.kahaku.go.jp/research/db/botany/azami/>（2021年8月14日閲覧）
- 小林史郎（2009）高知県植物誌，ユキノシタ科，高知県，高知県牧野記念財団 編
- Nakai, Takenoshin（1932）Notulæ ad Plantas Japoniæ & Koreæ XLII. The Botanical Magazine Vol.46pp603-632
- 織田 二郎・長益 英敏（2015）シカクホタルイの分類学的研究，植物地理・分類研究 Vol.63pp31-44
- OHASHI, Hiroyoshi（2000）A Systematic Enumeration of Japanese *Salix* (Salicaceae), Journal of Japanese Botany Vol.75pp1-41
- OHASHI, Hiroyoshi and NAKAI, Hideki（2006）*Salix dolichostyla* Seemen, a Correct Name for *S. jessoensis* Seemen (Salicaceae), Journal of Japanese Botany Vol.81pp91-97
- 長田武正（2002）増補 日本イネ科植物図譜（オンデマンド版），平凡社
- 大塚孝一・星山耕一・藤田淳一・尾関雅章・石田祐子（2017）長野県植物目録，長野県植物目録編纂委員会
- 尾関雅章・石田祐子・大塚孝一・藤田淳一・佐藤利幸（2018）長野県の標本資料密度：長野県植物誌改訂での重点調査地区はどこに？，長野県植物研究会誌 Vol.51pp17-20
- 清水矩宏・森田弘彦・広田伸七（2001）日本帰化

植物写真図鑑, 全国農村教育協会

杉本順一 (1965) 日本草本植物総検索誌＜双子葉編＞, 六月社

杉本順一 (1973) 日本草本植物総検索誌＜単子葉編＞, 井上書店

館岡亜諸 (1987) ツクシスズメノカタビラ (イネ科) の特性と分布, 植物分類・地理 Vol.38pp176-186

植村 修二・清水 矩宏・水田 光雄・森田 弘彦・勝山 輝男 (2010) 日本帰化植物写真図鑑 第2巻, 全国農村教育協会

米倉浩司・梶田忠 (2003-) 「BG Plants 和名ー学名インデックス」(YList), <http://ylist.info> (2022年1月1日閲覧)

吉山 寛・茂木 透 (2019) ヤナギハンドブック, 文一総合出版



図1 オオチゴユリ
(長野県南佐久郡佐久穂町大字海瀬 : TCCN21-0306 : 2021年5月23日)

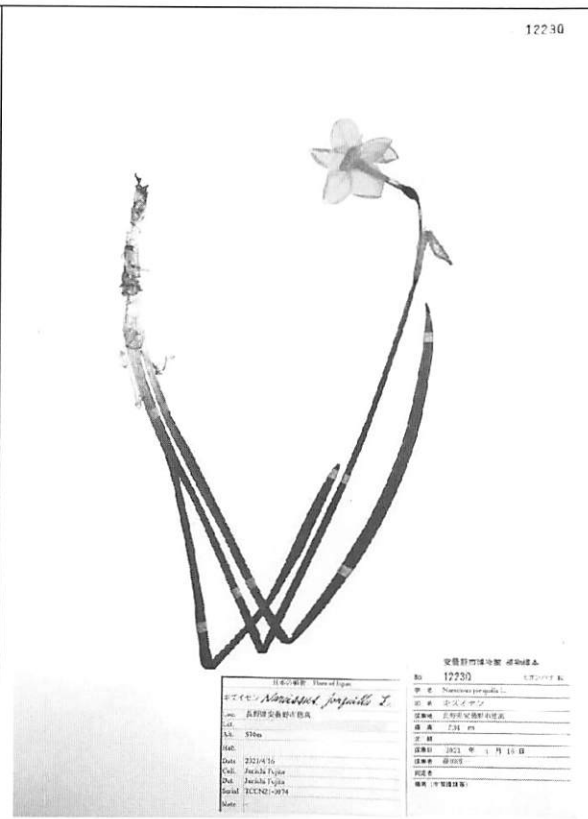


図2 キズイセン
(長野県安曇野市穂高 : 安曇野 12230 / TCCN21-0074 : 2021年4月16日)

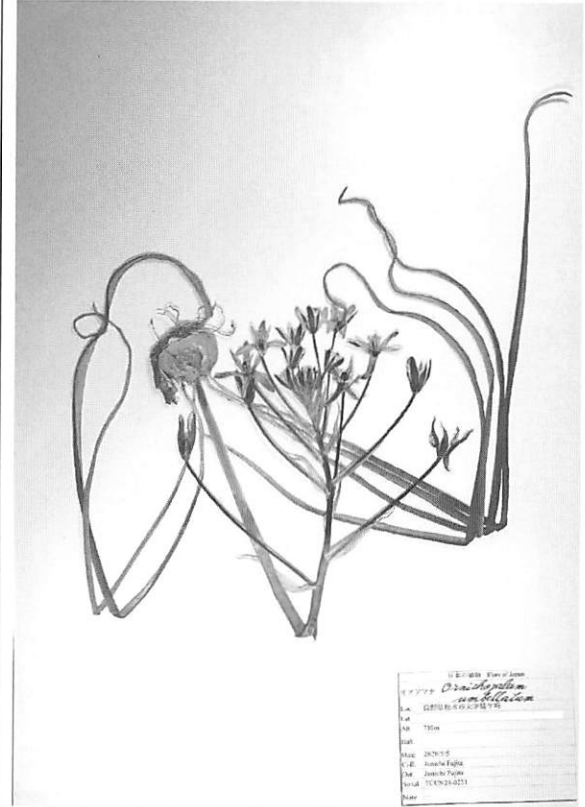


図3 オオアマナ
(長野県松本市大字蟻ヶ崎 : TCCN20-0221 : 2020年5月5日)



図4 ケスゲ
(長野県下伊那郡泰阜村門島 : TCCN21-0217 : 2021年5月4日)



図5 メアオスゲ×クササゲ
(長野県下伊那郡天龍村平岡：TCCN21-0277：
2021年5月16日)

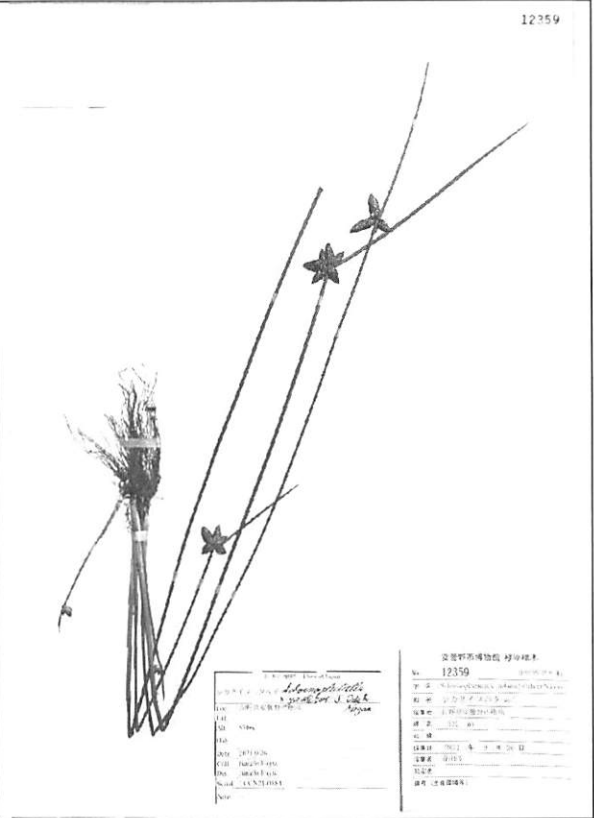


図6 シバクイヌホタルイ
(長野県安曇野市穂高：安曇野 12359
/TCCN21-0884：2021年9月26日)



図7 コイチゴツナギ×オオイチゴツナギ
(長野県下伊那郡天龍村平岡：TCCN21-0266：
2021年5月16日)

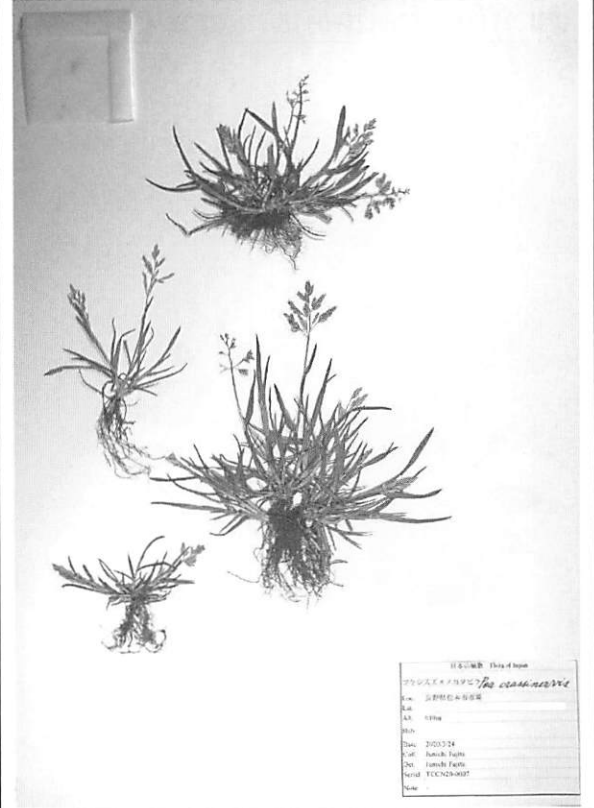


図8 ツクシズメノカタビラ
(長野県松本市市場：TCCN20-0007：2020年3
月24日)

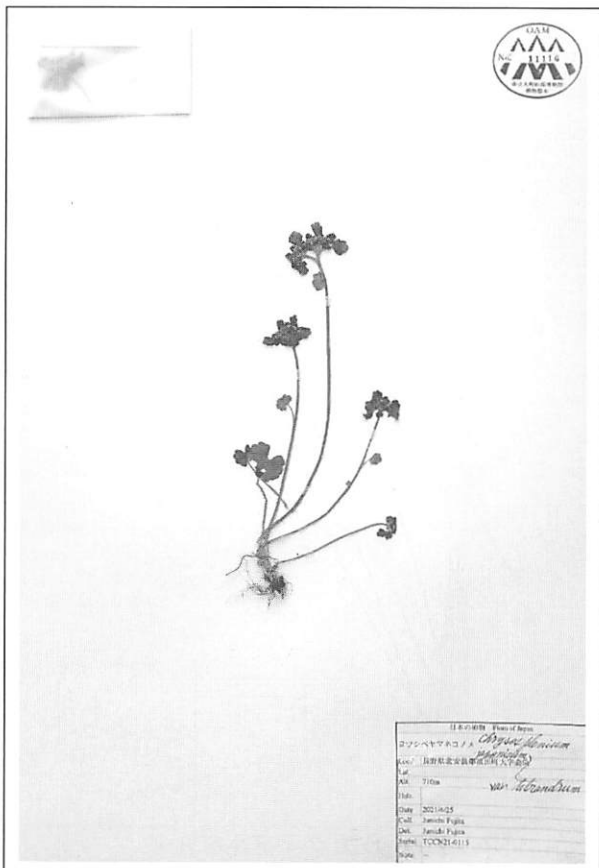


図9 ヨツシベヤマネコノメ
(長野県北安曇郡池田町大字会染：
OAM 11116, TCCN21-0115：2021年4月25日)



図10 ナガサキハギ
(長野県上伊那郡辰野町大字小野：TCCN21-
0695：2021年8月28日)



図11 タヨウハウチワマメ (長野県松本市奈
川：TCCN20-0424：2020年6月17日)



図12 ユウキシダレ (長野県安曇野市明科中川
手：安曇野 12214/TCCN21-0058：2021年4月10
日)(TCCN21-0493と同一個体)



図 13 ユウキシダレ（長野県安曇野市明科中川手：安曇野 12312/TCCN21-0493：2021 年 6 月 27 日）（TCCN21-0058 と同一個体）



図 14 イヌハナタデ（長野県塩尻市大字洗馬：TCCN20-0787：2020 年 9 月 12 日）



図 15 ハナヒメウツギ（長野県下伊那郡阿南町和合：TCCN21-0228：2021 年 5 月 4 日）

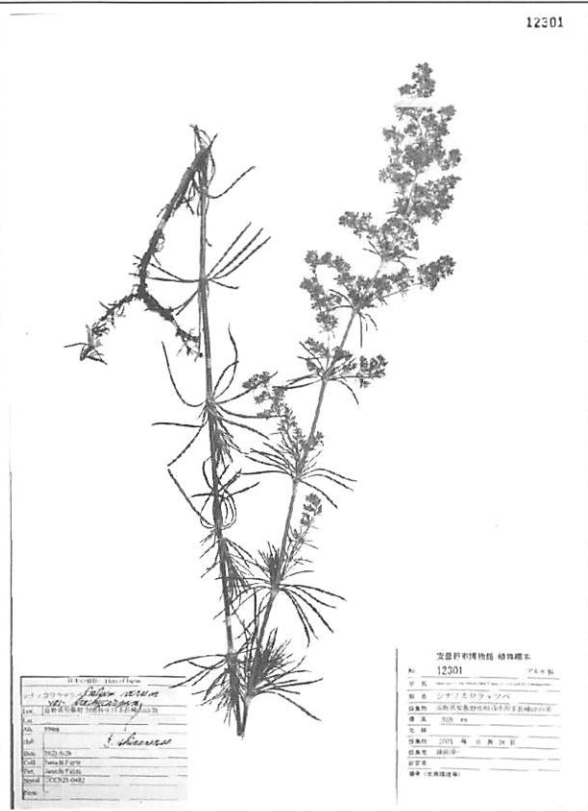


図 16 シナノカワラマツバ（長野県安曇野市明科中川手：安曇野 12301/TCCN21-0482：2021 年 6 月 26 日）



図 17 ナンブアザミ (狭義)
(長野県下水内郡栄村大字塚 : TCCN21-0631 :
2021 年 8 月 9 日)